中学校社会科授業における生徒の思考－ワークシートの書き言葉分析－

教育デザインコース　社会領域
吉良仁宏・境貴將・宋丹・髙木拓・松田裕之進・馬橋雄大・三浦寛人

１．問題の所在

新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」により、小集団活動の導入やパフォーマンス評価を取り入れた実践が全国で多く取り組まれている。一見すると活動的な授業風景ではあるが、生徒がどのように追究したのかについて丹念に分析し、かついわば授業からの離陸を促す指導となっているだろうか。自らに問いをもち更なる追究へと向かっているのだろうか。

更なる追究には当然ながら新たな問いを自らもつ必要がある。ではその契機は何か。わからなさの連続性を基軸とした連続的な追究の要件とは何か。これまで社会科が育成しようと取り組んできた学習者の多面的多角的な視点、つまり対立矛盾拮抗の関係にある視点である。

２．本研究の目的

本研究の目的は、既述の問題意識に基づいて事例研究として①授業内容・カリキュラムと学習者個々の視点（対立矛盾拮抗）との関係性に着目した授業分析に取り組み、②新たな問いが生じる契機を考察し、③その契機を取り入れたカリキュラム改善を提言する、と設定する。

３．分析方法

分析対象は横浜国立大学教育学部附属横浜中学校教諭山本将弘による歴史的分野における古代史から中世史の授業である。山本実践は調べ学習やグループ学習を積極的に取り入れ、ワークシートを活用している。ワークシートは、横浜中学校が長年にわたって開発してきた蓄積を有し、学習問題の設定プロセスや調べ学習内容、単元内で変容する思考を適宜記述し、学びの振り返りが図れる特色がある。分析の主な題材はワークシートにおける記述である。書き言葉には、思考の再構成された明瞭さがある。分析資料として抽出児を設定した参与観察によって得られたグループ内での会話、呟き、ワークシート記入時の修正なども加味する。抽出児の設定は授業者による選定である。参与観察の記録とワークシートの記述を分析考察し、そのうえで数回相互検討を実施した。分析時に抽出したのは、視点（立場）と選択された（価値づけされた）知識で構成された認識の枠組み（フレーム）との関連性である。視点の対立矛盾拮抗の様態を抽出しやすいためである。

４．分析結果－抽出児Ｃを事例として－

抽出児Ｃは、古代史において支配者が統治する際の重要な点として「税」と「信用」を捉えていた。一方中世史において「税」や「信用」という理解は見いだしにくかった。C が新たな問いを持つためには、「税」と「信用」を基軸にした農民、商人、領主、国家などの関連を捉える学習が必要であった。

５．成果と課題

生徒自らが作り出した視点やキーワードを抽出でき、それらの視点が単元展開の中で用いられにくくなる教材や学習問題の課題を見出せた。また、カリキュラム構成が個の思考と視点から組み替える必要性を提案した。

しかし、個の矛盾対立拮抗している視点を更に熟成させるカリキュラム改善までに至っていない点が課題として残された。